

# 住庵保勝会だより

令和2年6月吉日 保勝会員 374名 (R元年度)



平成の幻住庵模型

## 歴史と伝統を守り抜く決意のもとに



新緑の木立に囲まれた幻住庵

令和2年早々から百年に一度と言われる災禍、世界中を不安と恐怖に陥れた新型コロナウイルスによる感染症も、6月に入って「緊急事態宣言」が解除されたものの今だに収束せず、常に2次・3次感染のことを心配しながら、私達は毎日の生活を続けてます。一日も早いその収束を願うばかりです。

こういった事情で今年の保勝会の総会も、既にお知らせしましたように役員の方々の書面承認をもって総会決議とし、今年度の予算・事業等を決定させていただきました。

早速、各自治会長様を中心に各組長様の大変な尽力により保勝会員の募集と会費徴収も殆ど済ませていただき、誠に有難うございました。これで、昭和10年から途絶えることなく歴史と伝統を重ねて来た今年の第86回幻住庵芭蕉祭も、コロナのことが心配ではありますが、10月4日(日)の開催に向けて準備を進めることが出来るようになりました。今後、国分八町の皆様はじめ会員の皆様には何かとご支援・ご協力をお願いすることになるかと思いますが、どうぞよろしくお願ひいたします。なお、大津市の指示により令和2年度から月曜日に加えて木曜日にも休庵日となりましたのでお知らせしておきます。

(文責 陌間 實)

### 令和2年度の幻住庵保勝会役員一覧

役職	氏名	住所	役職	氏名	住所
会長 俳句事務局	はば 陌間 實	一丁目28-64	副会長	中村 芳昭	二丁目13-18
副会長 会計	今村 し平 かつ和	一丁目36-7	副会長	藤林 雅	二丁目362-11
事務局長	丸山 和夫	一丁目31-13	事務局次長	良峰 三男	一丁目47-12
理事	中住 大輔	一丁目1区自治会長	理事	井上 省太郎	一丁目2区自治会長
理事	山口 義則	一丁目3区自治会長	理事	西村 克	一丁目4区自治会長
理事	森澤 正利	一丁目5区自治会長	理事	桑山 義次	ソシエテ自治会長
理事	村上 肇	二丁目1区自治会長	理事	石田 雅英	二丁目2区自治会長
理事	山田 稔	一丁目9-24	理事	初田 まさゑ	一丁目5-21
理事	矢野 恵美子	一丁目4-32	理事	中山 豊子	一丁目7-3
理事	松崎 敏和	二丁目11-3	理事	高橋 敏	二丁目362-9
監事	後日決定	二丁目2区副会長	監事	後日決定	一丁目1区副会長

### 令和2年度の事業計画

事業名	月日	内容
新役員会	5/24	令和元年度事業・決算報告、令和2年度事業・予算、第86回芭蕉祭、
総会	6/14	【新型コロナウイルス感染のため中止】 役員による書面決議
合同役員会	8/23	第86回芭蕉祭について
俳句選考会①	9/1	幻住庵俳句コンクール年間優秀賞審査会 (一般の部)
俳句選考会②	9/17	幻住庵芭蕉祭俳句審査会 (少年の部: 晴嵐小6年、北大路中生徒)
芭蕉祭前日準備	10/3	芭蕉祭前日準備 (テント立て等)
第86回幻住庵芭蕉祭	10/4	第86回幻住庵芭蕉祭
〃 反省会	10/24	今年度の芭蕉祭の反省と来年度の課題
その他の事業	年間通して	幻住庵俳句コンクール【年4回 第101回~第104回】 (年4回実施。1回毎に整理・選句・選句集発行・入賞者に送付)



ゆくはる  
行春を近江の人とおしみける

元禄3年、幻住庵に入る前に唐崎で詠んだ句です。『堅田集』に「志賀唐崎に舟をうかべて人々春の名残りをいひけるに」詞書があるようです。句意は説明する必要はないでしょう。山本健吉は『近江の人』は、三人称にして二人称を兼ね、貴方がた近江の人という気持ちが含まれている。対詠的な発想の中に、湖南の連衆との暖かい連帯感情が匂い出てくる」と述べています。

この句をめぐる『去来抄』に有名なエピソードがあります。門人の尚白が、「近江」は「丹波」でもいいし、「行春」は「行歳」でもいい（俳句でやってはいけないとされている「ことばが動く」と批判しました。それに対して去来は「湖水朦朧として春ををしむに便りあるべし。殊に今日のうへに侍る」と言ったようです。芭蕉は「しかり、故人も此国に春を愛すること、をさをさ都におとらず」と言い、「汝や去来、ともに風雅をかたるべきなり」と去来を誉めたと言います。

芭蕉の胸中には「淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ」と柿本人麻呂の歌があったのでしょうか。それとも「鳥の海や霞のうちにこぐ船のまほにも春のけしきなるかな」と式子内親王の歌を思い浮かべていたのでしょうか。もちろん、芭蕉が敬慕してやまなかつたかの西行も近江の春を謳った歌を2首残しています。

からさき  
辛崎の松は花より 臙にて

「湖水の眺望」と前書があります。貞享2(1685)年3月、堅田・本福寺住職千那の別院での作です。「辛崎の一つ松は、花の季節の頃から一段と身頃になる。今夜も臙月夜の下に見えるが、実に美しい」との意でしょうか。

この句についても、門人たちの間でいろいろ議論があったことが『去来抄』などに書かれています。「臙にて」との「にて」留めが「慥なる切字なし」と批判されたようです。それに対して基角が「臙にてと居られて、哉よりも猶徹たるひゞきの侍る」と芭蕉を弁護しました。また去来は「是は即興感偶にて、発句なる事疑なし」と述べました。それに対して芭蕉は「予が方寸の上に分別なし、……只眼前なるは」（『雑談集』）、「角・基が弁、皆理屈なり、我はたゞはなより松の臙にて、おもしろかりしのみ」と言った（『去来抄』）ということです。

やまじ  
山路来て何やらゆかしすみれ草

「大津に出る道、山路を越えて」と前書があります。貞享2(1685)年3月、京都から小関越で大津に出る途中の句です。句意は説明の必要がありませんね。

初案は熱田白鳥町にある法持寺という山寺で「何とはなしに何やらゆかしすみれ草」と詠んだものを改作したようです。山本健吉は、「『何とはなしに何やらゆかし』では、さだかに捕らえられない自分の心の動きをそのまま言葉にただけで、その頼りなさに対する反省が、芭蕉の心のうちにあった。『山路来て』で、はっきり場所と時とが限定され、具象的になる。そして『ゆかし』には、薫の花の姿態に、ふとなつかしさを感じた心の揺ぎがでている。」と述べています。

また、門人の山口素堂は、この句を「道のべの木槿は馬にくはりけり」とともに、「甲子吟行」中の秀逸といえる、と述べたようです。